びわこの考湖学

―第3部―

1

未来を生きるための「手本」

テーマは「資源と生業」

平成20年1月からこの紙面をお借りして連載を始めました「びわこの考湖学」も、第1部「琵琶湖をめぐる交通と経済力」、そして第2部「琵琶湖をめぐる信仰の世界」を完結し、この度、第3部の連載を開始する運びとなりました。紙面を提供いただいた産経新聞、そして読者の皆様方にあつく御礼申し上げます。

さて、第3部のテーマは「琵琶湖をめぐる資源と生業」とさせていただきました。私たち、財団法人滋賀県文化財保護協会は、長年、県内の埋蔵文化財の発掘調査をはじめとする文化財の調査を行い、この成果を県民の方々に広く紹介している団体です。発掘調査は、遺跡に残された先人たちの暮らしぶりを現代に蘇らせる仕事です。発掘調査から見えてきた先人たちの暮らしぶり。それは一言で言えば「自然と共に生きる生活」だと思います。もちろん、自然からの「恵み」もあった半面、自然からの「脅威」もあったはずです。いずれにしても私たちの先人は、自然の一員として生活し、その命を継いできたのです。

一方、自然の民の子孫である、現代の私たちの生活はどうでしょうか?。人間は、強大な力を持ち、これを自然に対して使い始めました。そして、私たちの自然観も大きく変化しました。自然は共に生きるパートナーではなく、一方的に利用する相手と意識され、力を行使した結果、私たちは温暖化、環境の変化など、地球規模で深刻な問題に直面してしまいました。この現状を立て直すことは決して容易なことではありません。しかし、真摯に向き合わなければならない問題でもあります。

ビワマスの水揚げの光景。人々は今も琵琶湖の恩恵を受けて生活している。

この問題を解決するためのヒント、それは先人たちが「自然と共に生きる生活」の基で育んできた「文化」にあると思います。とりわけ、私たちが暮らす近江は、自然の資源に恵まれた国です。このおおもとに「琵琶湖」があることは言うまでもありません。

琵琶湖を中心に産み出されたさまざまな恵み、それは直接的な琵琶湖の恵みでもありますし、400万年という気が遠くなるような琵琶湖の歴史が造りあげてきた恵みもあります。そして、琵琶湖がもたらす、変化に富みながらも穏やかな気象がもたらす恵みもあります。第3部の連載では、これらさまざまな琵琶湖の恵みを、文化の視点から紹介して行きたいと思います。

当然のことながら、文化を培ってきたのは人の営みです。私たち文化財の調査員が見た先人の暮らしぶり、それは賢い自然との接し方もありますが、行きすぎた自然の利用のありさまもあります。この連載では、それらを過去の暮らしの化石とするのではなく、現在、そして未来を生きるための「手本」として紹介したいと思います。読者の皆様、琵琶湖の文化から未来を見通す旅に出発しましょう。

私たち滋賀県文化財保護協会の職員がガイドをつとめます。(財団法人滋賀県文化財保護協会　大沼芳幸)